介護相談員の声

「介護相談員活動の楽しみ」

介護相談員活動では、認知症の方との出会いが多い。

多くは認知能力、特に記憶力や見当識の低下による、“見知らぬ環境での生存に必要な、つながり能力の低下による不安”という情動の中に塞ぎこんでいることが多い。

過去の記憶の断片の中につながりを持っている。

この過去のつながりが、その人の仕草や表情をつくり、このことから私たちは、きっとこの方はこういう家庭婦人で、こんな感じの性格で…と想像できる感じになる。

このつながりにチャンネルというか、ラジオで言えば周波数が合うと、不安な表情は消える。

目に力があり、その人らしさが浸み出てくる。言葉は何を言っているか解らないが、口調などではその人らしさが感じられるものだ。

それは、カーテンの虫喰い穴から見える戸外の様子のようだ。

私も、この人の気心の知れた近所の奥さんとはこんな感じかな、と考えながら表情や口調をつくっていく。

上手くいけば、“そうなんよー”と言わんばかりに、私の腕に手を“ポン”としてくれることもあり、楽しい井戸端のおしゃべりが成立する。

介護相談員活動の“気付き”は、このような中から出てくる。

お年寄りの朗らかな笑顔には滋味がある。それを見られるのは、介護相談員の楽しみのひとつである。

京都市介護相談員　　市川　幸恵